

鳥取県沿岸における漂着動物の記録(2002年4月～2003年12月)

川上 靖*・平尾和幸・清末幸久

鳥取県立博物館学芸課自然係 (〒680-0011 鳥取市東町2-124)

Records of marine animals stranded on the coast of Tottori Prefecture,
Honshu, Japan from April 2002 to December 2003

Yasushi KAWAKAMI*, Kazuyuki HIRAO and Yukihsa KIYOSUE

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori-shi,
Tottori, 680-0011 Japan

Abstract Crestfish *Eumethichthys fiski* and northern sea lion *Eumetopias jubatus* were recorded for the first time on the coast of Tottori Prefecture, Honshu, Japan, in October 2002 and July 2003 respectively. From April 2002 to December 2003, rare animals in the Sea of Japan, i.e. ribbonfish *Trachipterus trachipterus*, oarfish *Regalecus glesne*, three species of sea turtles, and a species of hammer head shark, were stranded or observed on the coast of Tottori Prefecture. These records and literature surveys show that temperate-tropical marine animals have increased in number around Tottori Prefecture over the past several years.

2002年4月から2003年12月の間に、鳥取県の沿岸に漂着した海洋動物について報告する。さらに、過去の鳥取県沿岸の漂着動物の記録との比較から、近年の漂着動物の種類について、何か特異的な傾向がみられるのかどうか考察する。

鳥取県の漂着動物 (2002年4月～2003年12月)

2002年4月から2003年12月の間に、鳥取県沿岸に漂着した海洋動物を表1にまとめた。ただし、この記録は、鳥取県立博物館において調査および確認できたものだけである。図1～10に、漂着個体の写真を示した。なお、シュモクザメ科のサメ(以下、シュモクザメ)とトドについては、漂着ではなく沿岸での確認ではあるが、特異的な例であるので【確認】として記録に残した。

テングノタチ *Eumethichthys fiski* (アカマンボウ目アカナマダ科) とトド *Eumetopias jubatus* (アザラシ目アシカ科) については、筆者らの知る限り、鳥取県初記録である。

*E-mail: kawakamiy@pref.tottori.jp

種類	個体数	場所	サイズ	発見日	備考
シユモクザメ科のサメ (ネズミザメ目)	約15	鳥取市および岩美郡福部村の 沖合約20m~200m	体長約2~3m (推定)	2002年6月19日	釣り人が確認。その後、第八管区海上保安本部美保航空基地の ヘリコプターと鳥取県警のヘリコプターで調査が行われた。
テンガイハタ	1	【漂着】岩美郡岩美町陸上(東浜海岸)	体長約140cm	2002年8月9日	
<i>Trachipterus trachipterus</i> (アカマンボウ目フリソチウサ科)					
テングノタチ	1	【捕獲】気高郡青谷町 長尾鼻の沖約100m (水深約270m)	体長112cm	2002年10月1日	鳥取県初記録。イカ釣り用の擬餌針に引っ掛かり、引き 上げられた。生態・分布域など、ほとんど分かっていな い稀な魚類(図1)。
<i>Eumethichthys fiski</i> (アカマンボウ目アカナマダ科)					
アオウミガメ	1	【漂着・保護】 気高郡気高町八束水(海岸)	曲最小甲長48cm 曲標準甲長49cm 曲甲幅45cm (すべて放流時の測定値)	2002年10月22日	漁網が首に絡まった衰弱個体が漂着。気高町遊魚センタ ーなどで保護・飼育。2003年11月5日に標識をつけ鳥取 砂丘の沖合2kmで放流。その後、2003年12月11日に山口 県大津郡三隅町幸島地先にて再捕・放流された。
<i>Chelonia mydas</i> (カメ目ウミガメ科)					
テンガイハタ	1	【漂着】東伯郡北条町(北条海岸)； 北条オートキャンプ場付近)	体長約145cm 体重約3kg	2003年1月18日	釣針に引っ掛かり、引き上げられた(図2)。
テンガイハタ	1	【漂着】東伯郡東伯町(海岸)	体長約150cm	2003年1月19日	
アオウミガメ	1	【漂着】岩美郡福部村(砂丘道路沿いの海岸)	目測甲長 約60~70cm	2003年1月29日	激しく腐敗。
ソデイカ	1	【漂着】岩美郡福部村(砂丘道路沿いの海岸)	外殻背長約55cm 鰭幅約45cm	2003年1月30日	(図3)
<i>Thysanoteuthis rhombus</i> (ツツイカ目ソデイカ科)					
テンガイハタ	1	【漂着】東伯郡泊村(石臈海岸)	体長約130cm	2003年2月5日	(図4)
テンガイハタ	1	【漂着】鳥取市鳥取港	不明	2003年2月26日	非常に衰弱した個体が港内を漂流。
リュウグウノツカイ	1	【漂着】鳥取市白兔(白兔海岸)	体長266cm	2003年2月26日	海岸付近を漂っていた非常に衰弱した個体をサーファー が発見し、引き上げた(図5)。オキアミ類をおう吐、生 態の解明につながる貴重な記録(図6)。
<i>Regalecus glesne</i> (アカマンボウ目リュウグウノツカイ科)					
リュウグウノツカイ	1	【漂着】鳥取市賀露(賀露海岸)	体長約250cm	2003年2月下旬	
タイマイ	1	【漂着】岩美郡岩美町牧谷(熊井浜海岸)	甲長25cm, 甲幅21cm 脚長13cm, 頭長6.5cm 体重1.8kg	2003年3月2日	幼体。甲羅など全身に藻類がたくさん付着(図7)。剥製 にされ、鳥取県立山陰自然科学館に保管されている。
<i>Eretmochelys imbricata</i> (カメ目ウミガメ科)					
テンガイハタ	1	【漂着】西伯郡中山町 松河原の海岸	体長約100cm	2003年3月7日	3月12日の日本海新聞(新日本海新聞社)にリュウグウノツカイ と載っていたが、写真をみるとちろんテンガイハタと思われる。
テンガイハタ	1	【漂着】鳥取市賀露(賀露海岸)	体長約100~150cm	2003年3月8日	(図8)
テンガイハタ	1	【漂着】鳥取市鳥取港	不明	2003年3月14日	
アカウミガメ <i>Caretta caretta</i> (カメ目ウミガメ科)	1	【漂着】鳥取市中茶屋 (鳥取空港の西側の海岸)	甲長約70~80cm 甲幅約50~60cm	2003年7月13日	甲羅に藻類がたくさん付着(図9)。
トド(幼獣)	1	【確認】岩美郡岩美町大羽尾(羽尾海岸)	不明	2003年 7月19~20日	鳥取県初記録。日本海新聞(7月21日)や日本海テレビ などでアシカと報道されたが間違い。トドの幼獣である
<i>Eumetopias jubatus</i> (カメ目ウミガメ科)					

*羽尾漁港から西へ約300mのところ

考 察

2002年4月～2003年12月の間の鳥取県の漂着動物（表1）は、過去の漂着動物（清末, 1987, 1990; 安藤, 1992, 1993a, b; 田村, 1996a, b; 島田ら, 1998; 窪寺, 2001; 川上, 2002）と比較して、ほとんどが特異的であるといえる。以下、各動物群ごとに詳述する。

1) アカマンボウ目 Lampriformes に属する魚類の連続漂着

テングノタチ1個体（図1：鳥取県初記録）、テンガイハタ8個体（図2, 4, 8）、リュウグウノツカイ2個体（図5）の漂着記録があった（表1）。どの種も稀な種であり、生態・分布域など詳しいことは分かっていない（藤井, 1988）。鳥取県におけるアカマンボウ目に属する魚類の連続漂着は、1992年以来11年ぶりである（表2, 3）。

表2. 鳥取県におけるサケガシラ属 *Trachipterus*（サケガシラ *T. ishikawae*とテンガイハタ *T. trachipterus*）の漂着記録（清末, 1990; 安藤, 1993; 本報告; および鳥取県立博物館収蔵資料台帳より作成。ただし、沖合における定置網などでの捕獲記録は除外。）

発見日	場 所	備 考	
1973年 1月8日	気高郡気高町青谷海岸	サケガシラ ^{※1}	
	鳥取市賀露海岸	サケガシラ ^{※1}	
	鳥取市堀越海岸	サケガシラ ^{※1}	
1974年 3月10日	鳥取市堀越海岸	サケガシラ 体長約140cm	
1976年 6月7日	気高郡青谷町長尾海岸	サケガシラ 体長約190cm	
1978年 3月18日	岩美郡福部村浜湯山海岸	サケガシラ 体長約130cm	
	岩美郡福部村一ツ山	サケガシラ ^{※1}	
1981年 3月18日	岩美郡福部村一ツ山近くの海岸	サケガシラ 体長約134cm	
1983年 3月19日	鳥取市鳥取空港の北側の海岸	サケガシラ ^{※1}	
1987年 4月1日	東伯郡赤碓町赤碓海岸	サケガシラ 体長約150cm	
1988年 3月24日	気高郡気高町姉泊海岸	サケガシラ ^{※1} 体長約170cm	
	3月30日	気高郡気高町矢口の海岸	サケガシラ 体長約120cm
	4月9日	鳥取市賀露海岸	サケガシラ 体長約160cm
	4月27日	鳥取市の砂丘	サケガシラ 体長約160cm
1992年 1月4日	鳥取市賀露海岸	サケガシラ	
	3月8日	西伯郡大山町保田の海岸	サケガシラ 体長約140cm
	3月19日	岩美郡岩美町網代新港	サケガシラ 体長約160cm
	4月18日	米子市富益町の海岸	サケガシラ 体長約185cm
2002年 8月9日	岩美郡岩美町東浜海岸	テンガイハタ 体長約140cm	
2003年 1月18日	東伯郡北条町北条砂丘	テンガイハタ ^{※2} 体長約145cm	
	1月19日	東伯郡東伯町の海岸	テンガイハタ 体長約150cm
	2月5日	東伯郡泊村石脇海岸	テンガイハタ 体長約130cm
	2月26日	鳥取市鳥取港	テンガイハタ
	3月7日	西伯郡中山町松河原の海岸	テンガイハタ 体長約100cm
	3月8日	鳥取市賀露海岸	テンガイハタ
	3月14日	鳥取市鳥取港	テンガイハタ

※1：鳥取県立博物館収蔵資料。 ※2：鳥取県立博物館において冷凍保管。

注) サケガシラとテンガイハタは、同じサケガシラ属に属する分類学的差異の不明瞭な2種である。備考欄には、記録どおりの種名を記したが、2000年以前の鳥取県における記録は、テンガイハタは日本海に分布していないとされていたことなどから、すべてサケガシラとして記録されており、テンガイハタの可能性もある。また、2003年漂着のものもテンガイハタと同定したが、サケガシラと同定してもおかしくない個体もあった。

テンガイハタ（サケガシラ属）は、2002年8月から2003年3月にかけて8個体が連続漂着し、かつ、どの個体も衰弱したものか、死亡直後であった。このことは、この時期にかなりの数のテンガイハタが鳥取県沿岸に来ていたことを示唆していると思われる。鳥取県の過去の漂着記録をみると、

テンガイハタの記録はなく、同じサケガシラ属に属するサケガシラの記録だけである(表2)。これは、サケガシラとテンガイハタは形態的によく似た分類的差異の不明瞭な2種であり、2000年以前の漂着はすべてサケガシラとされていたためである(表2の注)。表2をみる限り、サケガシラ属の複数個体の漂着は4~11年の間隔で見られる。また、多数の個体が漂着した年は、定置網にも例年より多くの個体が入っていたらしい(安藤, 1992)。これらのことから、サケガシラ属は、何年か周期で鳥取県沿岸に大量にやってくる傾向がみられるということはいえるかもしれない。しかし、この傾向の根拠になると思われるような知見はとくに見当たらない。

表3. 鳥取県におけるリュウグウノツカイ *Regalecus glesne*の漂着記録(清末, 1990; 安藤, 1993; 本報告; および鳥取県立博物館収蔵資料台帳より作成)

発見日	場 所	備 考
1957年 2月 4日	岩美郡岩美町浦富海岸	体長約240cm ^{*1}
1965年 4月19日	気高郡気高町船磯海岸	体長約250cm
1974年 3月20日	気高郡気高町宝木海岸	体長約360cm ^{*1}
1980年 1月 1日	東伯郡赤碕町赤碕海岸	体長約300cm
1992年 1月11日	鳥取市白兔海岸	体長約331cm ^{*1}
2月 2日	気高郡青谷町長瀬海岸	体長約237cm
2003年 2月26日	鳥取市白兔海岸	体長約266cm ^{*2}
2月下旬	鳥取市賀露海岸	体長約250cm

※1: 鳥取県立博物館収蔵資料. ※2: 鳥取県立博物館において冷凍保管.

リュウグウノツカイ 2個体も、2003年2月の同時期に、近隣の海岸に衰弱状態で漂着しており、他にも複数の個体が来ていた可能性も考えられる。表3に、鳥取県におけるリュウグウノツカイの漂着記録をまとめたが、サケガシラ属と比べて漂着はとても少なく、6~11年間隔で1~2個体の記録があるだけである。2個体の漂着が記録されたのは、1992年と2003年の2回だけあるが、この2回ともサケガシラ属の多数漂着の年と重なっていることは意義深い。何か共通する要因があるのかもしれない。

また、調査中にリュウグウノツカイが胃の内容物をおう吐した(図6)。内容物はオキアミ類であり、リュウグウノツカイの生態を知るうえで貴重な記録である。

2) ウミガメ類の複数漂着

アオウミガメ2個体、タイマイ1個体(図7)、アカウミガメ2個体(図9, 10)の漂着記録があった(表1)。鳥取県において、3種のウミガメ類の漂着が同じ年に記録されたのは初めてである。

アオウミガメについては、2001年11月13日が鳥取県での初記録であり(川上, 2002)、その後、2002年、2003年と連続して漂着したことは、近年の特異な現象である。

タイマイについても、鳥取県の漂着記録は少なく、過去の記録は1956, 1960, 1970, 1995年の冬であり(清末, 1987; 鳥取県立博物館収蔵資料台帳)、今回の記録は8年ぶりとなる。また、漂着したタイマイは、過去の記録も含め、すべて甲長30cm前後の若い個体であることも特徴的である。

アカウミガメは、日本近海に生息するウミガメ類5種の中で唯一、本州(主に太平洋岸)で産卵するウミガメである(亀崎, 1996)。鳥取県におけるアカウミガメの記録は、清末(1987)と鳥取県立博物館収蔵資料台帳によると次のとおりである。漂着は【1973・1974・1975年の冬, 1972・1986

年の夏】に記録されており、どれも甲長が100cm前後あるので成体と思われる。また、過去5回、産卵あるいはふ化の記録がある【1960・1972・1974年、1982年9月28日岩美町、1989年10月31日岩美町】。他のウミガメ類の漂着はすべて冬場であるのに対し、アカウミガメは夏にも漂着がみられるのが特徴である。これは、夏場に産卵のためやってくるものが関係しているものと考えられる。

このように、鳥取県におけるアカウミガメの記録は少なくはなかったが、近年の記録はなく、2003年の漂着記録は17年ぶりとなる。今回2個体が漂着したが、どちらも夏であり、甲長は80cm前後であった(表1; 図9, 10)。内田(1982)によると、産卵上陸するアカウミガメ雌の甲長は72～107cm(平均89cm)である。これらのことから、今回のアカウミガメ2個体の漂着は、雄雌が不明ではあるが、時期と甲長サイズからみて、アカウミガメが鳥取県の海岸に産卵に来ている可能性を示唆しているものと考えられる。鳥取県のアカウミガメ産卵の確かな記録は1989年以来なく、また日本海側での産卵も稀であり、今後は注意深く産卵に関する情報収集を行っていきたい。

3) トドの初記録

生きたトドの幼獣が鳥取県において初めて確認された(表1)。このトドのその後の行方は不明である。トドは、北太平洋沿岸に分布し、日本では冬季に北海道周辺沿岸に来遊するものがみられるのみである(磯野, 1996)。したがって、夏季に鳥取県で確認されたことは異例な現象である。

以上、述べてきたように、2002年4月～2003年12月の間、鳥取県沿岸には稀な種が多く漂着した。アカマンボウ目の魚類は分布域など不明な点が多いが、ウミガメ類、シュモクザメなどは温帯～熱帯域の海洋動物である。川上(2002)は、2000年4月～2002年3月の鳥取県の漂着動物について、過去との比較から、温帯～熱帯域の動物(ウミガメ類、マンボウ類、シュモクザメ)が多かったことを報告している。2000年4月～2002年3月に続いて、2002年4月～2003年12月においても温帯～熱帯域の動物が多く漂着・確認されたことは、最近数年間に限ってみられる特異的な現象といえよう。

また、2002年から2003年にかけて2年連続で、日本最大のクラゲであるエチゼンクラゲ *Stomolophus nomurai* (根口クラゲ目ピゼンクラゲ科) が、鳥取県をはじめ日本海沿岸各地で大量発生し、漁業に大きなダメージを与えている(本田, 2004)。エチゼンクラゲは主に東シナ海方面に分布する。日本海へは水温の最高期となる夏場に対馬暖流に乗って出現し、冬の最低期を前に消失する。日本では、過去に概ね数十年おきの大量発生が知られており、この2年連続の大量発生は異例といえる。さらに、鳥取県水産試験場によると、2003年は鳥取県沖の水温が平年より高いため、エチゼンクラゲの消失時期も遅れることを予測している。

これらのことを総合的にみると、ここ数年、過去と比較して、鳥取県沿岸(日本海)にやってくる温帯～熱帯性の海洋動物は増加の傾向にあるということが指摘できると思われる。また、この温帯～熱帯性動物の増加傾向は、川上(2002)もふれているが、日本海、とりわけ対馬暖流の何らか

の変化を示唆しているものと考えられる。漂着動物の状況などから推察して、この変化のひとつに水温上昇はありそうである。現在「地球温暖化」が世界的な環境問題になっており、水温上昇というところとの関連が気になるころではあるが、因果関係については、今後の多方面からの調査研究や議論に待ちたい。もし、地球温暖化との関連があるならば、この変化は一時的なものではなく、今後も経常的に続くことが予測される。したがって、今後も鳥取県（日本海）における海洋動物の漂着記録を取り続けることは意義のあることであり、継続していきたい。

謝 辞

松浦啓一博士（国立科学博物館）には、漂着魚類の調査方法から本報告の原稿の校閲に至るまでご指導いただいた。また、増田修氏（姫路市立水族館）、地村佳純氏（碧南海浜水族館）にはウミガメ類の同定・文献収集等において、丸山将士氏（鳥取県立とっとり賀露かっこ館）にはエチゼンクラゲの情報収集等において、安藤重敏氏（鳥取県立博物館）には漂着動物の調査において、たいへんお世話になった。以上の方々に厚くお礼申し上げる。さらに、逐一お名前をあげることがはしませんが、漂着動物を発見し、様々な情報をお寄せいただいた鳥取県栽培漁業センター職員の方やその他の多くの方々に心よりお礼申し上げる。

引 用 文 献

- 安藤重敏, 1992. アオイガイとタコブネ. 郷土と博物館通巻74号, 鳥取県立博物館: 27-28.
- 安藤重敏, 1993a. 海からの珍客たち. 郷土と博物館通巻76号, 鳥取県立博物館: 1-5.
- 安藤重敏, 1993b. オオギハクジラ全身骨格標本. 郷土と博物館通巻77号, 鳥取県立博物館: 23-24.
- 藤井英一, 1988. アカマンボウ目 Lampriformes, pp. 113-115. In: 日本産魚類大図鑑第2版. 東海大学出版会(東京), 466pp.
- 本田夏海, 2004. エチゼンクラゲの大量来遊について. 第4回鳥取県水産研究・実践活動報告会講演要旨集, 鳥取県農林水産部水産振興局: 4-5.
- 磯野岳臣, 1996. アシカ類一トド, p. 92-94. In: 日本動物大百科第2巻哺乳類II. 平凡社(東京), 155pp.
- 亀崎直樹, 1996. ウミガメ科 Cheloniidae, pp. 62. In: 日本動物大百科第5巻両生類・爬虫類・軟骨魚類. 平凡社(東京), 189pp.
- 川上 靖, 2002. 鳥取県沿岸に多数漂着したヤリマンボウ属(予報)とその他の漂着動物(2000年4月~2002年3月). 鳥取県立博物館研究報告, 39: 37-42.
- 清末忠人, 1987. 鳥取県沿岸の漂着動物について(1). 鳥取生物, 21: 15-20.
- 清末忠人, 1990. 鳥取県沿岸の漂着動物について(2). 鳥取生物, 24: 1-7.
- 窪寺恒己, 2001. 日本近海産ダイオウイカの分類に関する問題点. うみうし通信, 32: 2-5.
- 島田章則・巖城 隆・安藤重敏, 1998. 鳥取県鳥取砂丘海岸に漂着したコマッコウ *Kogia breviceps*. 鳥取県立博物館研究報告, 35: 19-34.
- 田村昭夫, 1996a. ヤリマンボウより得られた寄生虫. 郷土と博物館通巻82号, 鳥取県立博物館: 27-28.
- 田村昭夫, 1996b. 日本海に生息する大型動物の剥製. 郷土と博物館通巻83号, 鳥取県立博物館: 21-22.
- 内田 至, 1982. 海ガメ学入門II—繁殖の生態—. 海洋と生物, 4 (6): 402-410.